

春 告 草

第 49 号 平成 29 年 2 月 1 日 進路指導部発行

センター試験実施される

平成29年度大学入試の幕開けを告げるセンター試験（大学入試センター試験）が1月14日、15日の2日間にわたって実施され、本校からは6年生 148 名が5会場（昨年同様、東京学芸大学、一橋大学、津田塾大学、東京経済大学、明治薬科大学の5大学）に分かれて受験してきました。

1日目は、地歴・公民、国語、外国語の3教科が行われました。地歴・公民2科目受験の生徒は午前9時30分から英語リスニング終了の午後6時10分まで、9時間弱にわたって緊張が強いられる試験初日となりました。

2日目は理系科目で、理科①（基礎科目）、数学①（数学Ⅰ or 数学ⅠA）、数学②（数学Ⅱ or 数学ⅡB）、理科②（専門科目）が行われました。理科②を1科目だけ受験する生徒は、数学②の終了後、理科②の試験開始まで2時間待たねばならず、空き時間をどう過ごすかが、センター試験受験の重要なポイントとなります。尚、私大文系で国語、地理歴史・公民、英語の3教科で済む生徒は2日目の受験は必要ありません。

大学入試センター試験時間割

	時 間	科 目
第一日	9:30~10:30	地歴・公民
	10:40~11:40	地歴・公民
	13:00~14:20	国語
	15:10~16:30	外国語
	17:10~18:10	英語リスニング
第二日	9:30~10:30	理科①
	11:20~12:20	数学①
	13:40~14:40	数学②
	15:30~16:30	理科②
	16:40~17:40	理科②

センター試験を振り返る

大きな失敗のなかった 2017 センター

現行課程になり3年目のセンター試験だったが、1年目に見られた教科内平均点のバラつきもなく、穏やかに終わった今年のセンター試験だった。

新旧両課程の受験生が混ざった1年目は理科②で得点調整が行われたが、今年は理科②で17点（生物69点-化学52点）と差が開いたものの、地理歴史では6点、公民でも8点と平均点の差は広がり、得点調整は行わないと発表された（平均点は中間発表時のもの）。

出題内容も受験生が十分に練習を繰り返してきたパターンが多く出題され、国語でのダウンがあったものの、他教科は平均点の上昇した科目が目立った。

大変ざっくりとした言い方になるが、「大きな失敗のなかったセンター試験」と評価ができる今年のセンター試験だった。

センター試験平均点

教科グループ	科 目	配点	平均点		平均点 (昨年)
			本校	全国	
国 語	国語	200		106.9	129.4
地理歴史	世界史 B	100		65.4	67.3
	日本史 B	100		59.3	65.6
	地理 B	100		62.3	60.1
公 民	現代社会	100		57.4	54.5
	倫理	100		54.7	51.8
	政治・経済	100	非 公 表	63.0	60.0
	倫理・政経	100		66.6	60.5
数 学 ①	数学Ⅰ 数学 A	100		61.1	55.3
数 学 ②	数学Ⅱ 数学 B	100		52.1	47.9
理 科 ①	物理基礎	50		29.7	34.4
	化学基礎	50		28.6	26.8
	生物基礎	50		39.5	27.6
	地学基礎	50		32.5	33.9
理 科 ②	物理	100		62.9	61.7
	化学	100		52.0	54.5
	生物	100		69.0	63.6
	地学	100		53.8	38.6
外 国 語	英語	200		123.7	112.4
	リスニング	50		28.1	30.8

（※全国平均は中間発表・平成29年1月20日大学入試センター発表）

国語難化も数学、英語の易化で文系受験生の平均点はUP

科目別概況でも解説するが、国語は難化し平均点は昨年より20点以上のダウンが予測される。25年度試験から5年間の推移をみると、101.04→98.67→119.22→129.39→106.93（中間集計）。2年連続で平均点が上がった反動が大きかった。それでも、数学と英語の平均点アップに加え、国公立大文系受験生にとっては、生物基礎の平均点アップが影響して、5-8文系生の平均点は昨年比で+7.3点前後（データリサーチ集計）となる見込みである。

反対に理系生徒にとっては、国語、特に現代文の難化に加え、化学の難化もあり、5-7理系生の平均点は昨年比で-3.3点前後（データリサーチ集計）となる見込みである。化学は平均点では-2.7点だが、最近3年間の平均点推移は62.50→54.48→51.95（中間集計）と2年続けてのダウンである。（26年度以前は旧課程化学Iでの実施だったため省略）

現役生、浪人生の学力差は理数科目で歴然

右表はデータリサーチ（自己採点）の結果を集計したもの。集計数は462,247人でセンター試験志願者数の約8割で、受験生全体の様子を反映しているとみて良いだろう。

これによれば、現役生、浪人生で差が開いた科目は差が大きい順に、数学ⅡB（18.8点）、英語筆記（15.3点 100点満点換算）、化学（15.3点）、数学ⅠA（14.9点）、物理（14.2点）、生物（13.3点）、現代社会（13.2点）…となっている。理数科目で現役生が浪人生に遅れをとっている状況が認められる。

センター試験平均点の現浪差（ベネッセ駿台・データリサーチによる）

	平均点					
	全体	前年差	現役	既卒	現-既	
5-8 文系	565.4	+7.3	559.0	647.4	-88.4	
5-7 理系	573.9	-3.3	557.8	660.1	-102.3	
5教科総合	570.7	+0.6	558.3	657.3	-99.0	
3教科/国英歴	306.1	-15.9	300.7	355.9	-55.2	
3教科/数英理	318.5	+22.0	310.5	378.0	-67.5	
国語	109.1	-22.5	107.2	128.5	-21.3	
数学	数学ⅠA	62.5	+5.6	60.9	75.8	-14.9
	数学ⅡB	53.3	+4.1	51.1	69.9	-18.8
英語	筆記	126.4	+10.9	123.6	154.2	-30.6
	リスニング	28.6	-2.7	28.1	33.7	-5.6
	筆記+リ	123.9	+6.5	121.3	150.3	-29.0
地歴	世界史B	66.7	-1.6	65.8	78.3	-12.5
	日本史B	60.5	-6.2	59.6	72.5	-12.9
	地理B	62.8	+2.2	61.5	71.1	-9.6
公民	倫理	55.9	+3.1	55.4	63.0	-7.6
	政治・経済	63.7	+3.2	63.1	75.1	-12.0
	現代社会	57.8	+2.7	57.1	70.3	-13.2
	倫理・政経	68.0	+6.1	67.3	71.8	-4.5
理科	物理基礎	30.0	-5.0	29.2	35.9	-6.7
	化学基礎	29.1	+1.7	28.7	35.4	-6.7
	生物基礎	39.9	+11.8	39.6	44.0	-4.4
	地学基礎	33.0	-1.3	32.7	37.3	-4.6
	物理	64.6	+1.5	62.4	76.6	-14.2
	化学	53.5	-2.7	51.2	66.5	-15.3
	生物	69.8	+4.8	68.2	81.5	-13.3
地学	55.1	+14.4	53.6	64.8	-11.2	

※5-8文系、5-7理系および5教科総合の平均点は900点満点の集計

科目別概況

国語

■ 国語 — 現代文の難易度がUP、漢文は日本漢文が出題 —

現代文第1問（評論）は硬質な科学論からの出題。本文量は700字程度増加し、4000字を超えた。3行選択肢も多く、読み取りには時間を要する。第2問も解くには手間のかかる問題である。古文では和歌が復活したが、内容読解の問題は正誤がはっきりしており、選びやすい出題。漢文で日本漢文が出題されたのは、平成24年度追試験で頼山陽が出題されて以来、本試験としては初めて。語の読み、意味や返り点の付け方と書き下し文、内容説明、理由説明など、設問は標準的であったが、文の解釈は出題されなかった。

現代文・古典ともに、文章全体の主旨や主題を把握する力が必要とされ、全体としての難易は、平均点の高かった昨年に比べて難化した。

数学

■ 数学Ⅰ 数学A — 昨年と同様の問題構成。確率で適当な事象を選ぶ設問があった —

大問数、配点は昨年と同様。計算量も昨年並。新課程テストになり、関数では旧課程ではあまり扱われなかった内容が問われていたが、今年はオーソドックスな出題。過去問演習をしっかりとってきた受験生は難なく解ける問題。「データの分析」は昨年同様、変数の変換が扱われた。相変わずページ数も多く（6頁にわたる出題）、図表の読解が問われる設問も従来通りである。「場合の数と確率」では、和事象となる排反な事象を複数選択させる問題が出題され、和事象や排反事象の正確な理解が問われた。易化した昨年よりさらに易化。

■ 数学Ⅱ 数学B — 複数の大問で、異なる分野の知識を用いる力が試された —

問題構成は昨年と同様。問題量も昨年並であるが、複数分野の融合問題の出題は目新しい。第1問〔2〕では2年間出題のなかった「図形と方程式」の知識を用いる問題が、「指数関数・対数関数」をテーマとした大問で出題された。第3問数列でも後半で対数が出てくる。解答欄に記号をマークする問題が比較的多く見られ、計算量はやや減少した。昨年より易化。平均点が40点を切った平成27年度に比べれば、相当の難易差がある。

外国語

■ 英語筆記 — 物語は出題継続。英文の内容を大づかみさせる傾向が一層顕著に —

グラフや生活情報、論説に加え、昨年の追試験で9年ぶりに復活した物語文が今年も出題された。本文の理解がやや難しく、行間の意味を推測するなど素材に応じた読み方が求められた。総語数は昨年より約50語増えて、4,335語。全体的に概要を問う問題の出題が多く、現行課程で重視される英文の内容を素早く大づかみする力が一層求められた。第5問は難化したが、全体としては易化。

■ 英語リスニング — 実践的な英語力に加え、音声＋非連続テキストの同時処理が鍵に —

文字情報と音声情報を組み合わせて答える問題や、話し合いの場面が出題され、場面に応じた聞き取りを要する実践的な英語力が求められた。読み上げられた英文の総語数は1,145語（昨年は1,129語）、質問・選択肢の総語数は昨年に比べて約70語減り、選択肢の読み取りの負担は若干軽減されているが、ポスターの情報を読み取ったり、言葉の言い換えがより問われるようになったことから、全体的な難易度はやや難化。

地理歴史

■ 世界史B — 地域網羅性が高まり、地図の読み取り問題が増加、グラフも継続 —

昨年よりアジアが減少してアフリカが増加するなど地域網羅性が高まった。現代史と社会経済史が増加した。地図を用いた問題が増加し、昨年同様グラフを読み取って判断する力も求められたが、時期判断問題は減少し、基本的な内容が中心。日本国憲法や治安維持法など、日本史関連についても出題された。難易は昨年並。

■ 日本史B — 史・資料の読解力が要求され、統計資料を用いた出題が復活 —

主題学習を意識した歴史と生活を結びつけるテーマ性の強い出題がみられた。また、現行課程で重視されている史・資料を読解し解釈する力や、地理的視点に基づいた考察力が求められる傾向が続いた。政治史からの出題が増え、文化史が減少したが、一部に難易度が高い設問もあり、全体としては昨年よりやや難化。

■ 地理B — 図表読解力重視の傾向は継続、昨年に続き「比較地誌」が出題 —

2か国を扱う「比較地誌」の大問が昨年に続いて出題された。例年通り多彩な図表が用いられ、歴史的背景を問う出題もみられた。確実な図表読解力と地理的思考力のほか、詳細な知識が求められた。地理Bのほぼ全分野からまんべんなく出題される傾向は変わらず、昨年よりやや易化。

公民

■ 倫理 — 目新しい人物や思想内容が扱われたが、全体では基本的な問題が増加した —

大問構成や出題分野は変更なし。現行課程教科書で記述の増えた現代思想分野の人物を意識した設問構成となっている。目新しい人物や思想内容が登場しているが、基本的知識で解答できる問題が増加した。ピカソや雪舟などの芸術家の出題もみられ、現代の思想では現象学やクーンの思想の理解が問われた。やや易化。

■ 政治・経済 — 各分野から基礎的かつ重要な事項を中心に網羅的に出題された —

「倫理、政治・経済」との共通の設問が4大問中、3大問で出題された。基礎的かつ重要な事項の定着を問うとともに、統計資料等を用いた論理的な考察力や読解力を要する出題もみられた。家計・企業・政府の経済循環に関する問題や需要曲線・供給曲線の問題など、基本事項が中心に問われていて、難易は昨年並。

■ 現代社会 — 写真を用いた出題や文章の趣旨を問う出題がみられた —

大問内や設問内で各分野を融合的に問う問題、写真を用いた問題や文章の趣旨を問う問題が出題された。思考力・読解力を必要とする資料問題や時事的な知識を要求する出題もあった。制度や政策、現状を問う問題を中心として、各分野から偏りなく出題され、基本事項の知識を問う問題が中心であり、昨年よりやや易化した。

■ 倫理、政治・経済 — 「的確な文章読解力」と「基本事項どうしをつなぐ力」で明暗 —

全設問が「倫理」および「政治・経済」からの転用であった。倫理分野の読解量はやや減少して思想家の正確な内容理解が問われ、やや難しい内容。政経分野では基本事項どうしを関連づけて考えることが求められたが比較的取り組みやすい設問が並んだ。難問は少なく、全体的な難易は昨年より易化した。

理科①

■ 物理基礎— 現行課程になってはじめて組立単位や回路の短絡が出題された —

昨年同様、典型的な素材を中心として、物理基礎の全範囲から幅広く出題された。発電方法や磁場に関する問題が昨年に引き続き出題されたが、その一方で、組立単位や電気回路の短絡に関する特徴的な出題もみられた。グラフ選択の問題がなくなり、計算量がやや増えた影響もあり、やや難化。

■ 化学基礎 — 思考力を要する問題は難化したが、基礎的な知識問題が増加 —

読解力や思考力を要する問題が難化したが、基礎的な知識問題は昨年より増加した。計算問題では、教科書レベルの問題もある一方、複数の思考過程を要する問題もあり、十分に演習していない受験生には難しかったであろう。実験に関する問題が4問あり、実験が重視されている。内容的には、実験の操作に関するもの、文章記述から実験内容を判断するものなどが出題され、昨年と同様に探究活動を重視する姿勢がみられた。難易は昨年よりやや易化した。

■ 生物基礎 — 昨年同様、知識問題や初見の図から考察する問題が出題 —

昨年と同様、基本的な知識を問う問題、計算問題、データを読み取る力を問う問題が、万遍なく出題された。出題分野に関する正確な知識の他、問題を読み解き思考する力も必要とされたが、取り組みやすい内容が全体的に多い。計算問題は、細胞周期に関する標準的な計算問題であり、昨年の腎臓の濃縮率に関する計算問題に比べて正答率が高いだろう。昨年より易化した。

■ 地学基礎 — 第4問は会話形式で、天文と地質・地史の融合問題が出題 —

地学基礎の各分野からバランスよく出題された。大問数は4問に増加。写真と説明文が一体化した選択肢および会話形式の出題は目新しい。計算問題は昨年の1問から今年は3問に増加した。グラフを読み取って計算する問題は2問出題され、知識と計算力を要した。第4問は天文と地質・地史の融合問題で、両分野の正確な知識を要した。難易は昨年並。

理科②

■ 物 理 — 熱力学が必答となり、選択問題は波動と原子になった —

熱力学が必答となり、選択問題は波動と原子になった。電磁気では、誘導電流が流れる時間範囲をダイオードの性質から考察させる問題が出題された。小問集合の配点が増加し、全体の解答数も増加。一方、組合せ問題は11問から6問に減少。誘導が少なく、自分で手順を組み立てる必要がある問題もあったが、ほとんどは素直で解答しやすい問題であった。難易は昨年並。

■ 化 学 — 問題が長文化し、読解力を必要とする問題が多く出題された。難易は昨年並 —

「化学基礎」を含む化学の全範囲から出題された。昨年と同様の大問構成であり、高分子化合物が必答として出題された。有機化合物で解答数が増加した。長い文章の問題が増加しており、短い時間の中で問題の内容を正確に把握する力が要求され、また、思考力を要する問題が多く出題された。難易は昨年並。

■ 生 物 — 基本的な知識と、初見の題材を読み解く考察力が要求された —

昨年同様、知識だけでなく、実験結果に関する考察問題や計算問題など、さまざまな観点から幅広く問われた。また、選択問題として、複数の分野を扱う問題が出題された。考察問題における実験条件の設定などが昨年の問題に比べてやや複雑なものが多かったが、選択肢数の少ない小問も多く、昨年より易化した。

■ 地 学 — 文章選択問題が減少。全体的に基本的な知識と考察力が問われた —

文章選択問題が減少。全体的に基本的な知識と考察力が問われ、グラフ・図を扱った問題が多かった。特に、天文分野では知識問題が中心であった。海面の高さの平面図から圧傾度力を読み取り、流速を計算させる問題は目新しい。難易は昨年より易化した。

一橋大会場では45人が東キャンパス、西キャンパスに分かれて受験。西キャンパスでは国公立大理系志望の男子生徒が受験した。国公立大文系志望の生徒は東キャンパスで受験したが、東京学芸大に回った生徒も43人いた。

